

ある訪問看護師のアタマの中

2

～精神科訪問看護の関係作り おもてなしに要注意～

山岸 若菜

はじめに

先日、自分が精神科の訪問看護を始めて10年以上になることを知らされました。体感的にはまだ5年ぐらいかなという感じだったので、驚きました。

それまでは、普通に病院で働いたり、身体の病気をもちながら在宅生活をされている方の訪問看護をしていました。

精神科に関わるようになってから、精神科とそれ以外の科との違いに戸惑うこともありました。今回は、なんでこんなことになるの！？と、戸惑いながらも日々悪戦苦闘している話を書こうと思います。

これから先は精神科以外の科のことを一般科と書くことにします。

一般科で聞きなれない言葉

精神科でよく聞く言葉に「関係作り」があります。

訪問看護での「関係作り」とは、利用者さんに自分たちを「悪い人ではなさそうだ」と思ってもらって、毎週会うことを受け入れてもらう段階というのがしっくりきます。

そこがしっかりできてから、少しずつ信頼関係を築いていくイメージです。

それまで経験していた一般科の訪問看護では聞かない言葉でした。利用者さんは、看護師がどんなことをしに来るのか理解してくれていて、訪問すると歓迎してもらえるのが当たり前でした。だからわざわざ「関係作り」として意識したことがなかったのです。

ところが、必ずしも自分から望んで治療を受けている人ばかりではない中、精神科訪問看護では、まずこの「関係作り」がとても大切だと知りました。

訪問導入期に気を付けること

訪問看護が始まる時は、入院中に病院から利用者さんに「退院後に訪問看護を受けてみませんか？」と提案があります。

利用者さんが了承されると、主治医が利用予定の訪問看護ステーションに「訪問看護指示書」を発行し、訪問看護がスタートします。

訪問看護について入院中に説明を受けて同意し、契約を結ぶのは精神科も一般科も同じです。

それでもいざ病院から退院して、いきなり知らない人が自分の家に毎週やって来るとなると、精神科の利用者さんはとても警戒しています。

なるべく早く関係作りをしていきたいのですが、この時期に大事にするのが、利用者さんの家の環境に口を出さないということです。

利用者さんのいる場所は病院ではなく自分の家なので、何をしよう、どうなっていようと、他人が口を出すことではない、というのがその理由です。

利用者さんの生活環境の問題をどうにかしていくのは、とりあえず関係が出来てからの話になります。

とはいえ、この生活環境にパンチがありすぎるのが精神科訪問看護です。

関係作りに必要な鈍感力

まず、精神科の利用者さんは、病気の影響で自分や部屋を衛生的に保つことが難しくなる人が多くいます。
ご自身は何日もお風呂に入れておらず、部屋の中も物があふれて、足の踏み場がないのはごく普通です。

コバエが飛んでる、ウジがわいてる、利用者さんとお話している間をゴキブリが横切る、正座で痺れた足に猫が乗ってくる。
何かの汁を踏んづけて靴下がしっとり濡れることもあります。
それでも、帰りの車の中で靴下を替えるだけで「掃除したら？」とは、この段階では決して言いません。

そんな不衛生な環境の中、大きな鍋で獣臭い何か茶色いドロツとしたものが、グツグツ煮込まれているのを見たこともあります。

絵本でしか見たことないビジュアル。
魔女がかき混ぜてるやつや…。

何を煮込んでいるのですか？と聞いたら、
「アザラシの肉です。」
と教えてくれました。

「なるほど。」

と、何ができるほどなのかわからない返事をしながら、

ここに毎週来るのか…。

と思ったことを覚えています。

潔癖症でなくてもなかなかしんどい時期ですが『たいていの事に動じない心を手に入れるための修行』だと思おうようにしています。

おもてなしには要注意

本当に覚悟が必要なのは、この家の状況で、利用者さんなりにもてなそうとされる時です。

初めての訪問の時など、恐る恐る出してくれるコップから、

「この人は自分が出したものに手をつけてくれるのか？」

と、こちらを窺っている気持ちをヒシヒシ感じます。

ドキドキしながら用意をしてくれたんだろうなと思うと、そんな精一杯のおもてなしを断ることはできません。

これはいつ洗ったんやろう？

ていうか、洗ったことあるのかな？

と思うぐらい汚れたコップに入ったお茶が出てくることもあります。

そんな時は、不自然に見えない動きで素早く、一番汚れが少なそうな飲み口を探しだす技術が試されます。

そうしてお茶をいただくと、ようやく少し利用者さんの緊張が緩まる気がします。

有名な最中のなれの果て

通常はそれから少しずつ日常のお話を聞いていくのですが、ある日、お茶をいただいた後にあんこたっぷりの最中を出してくれた高齢の方がいました。

「仙太郎のやで。持って帰って食べて。」

仙太郎という老舗和菓子屋さんの『ご存じ最中』という人気の和菓子です。あんこがこれでもか！というぐらいたっぷり入っていて美味しいんです。

ほんまやったらめっちゃ嬉しいんやけどなー。

テーブルに直置きしてはったような・・・。

・・・ん？なんかあんこの様子がおかしいぞ？

と思ったらあんこに群がるアリの大群でした。

ひえ～！ご存じ最中ちゃうやん！アリンコ最中やん！

「いやいや。いただけないです。お気持ちだけいただいております。」
と断っても、

「大丈夫やって。今食べ。今食べたら誰にもバレへんし、怒られへんで。」
と一切悪気のない気遣いで追い詰めてきます。

今?!ここで?!
無理無理無理!
怒られるとかそういう問題ちゃうねん。
アリンコやねん。
それ、ほぼアリンコやねん!

あんこがアリだったという衝撃と、あの美味しい最中がこんなことに…という怒りと悲しみに、頭の中では利用者さんの胸ぐらを掴んでゆさぶる勢いでした。

が、このまま置いておいて利用者さんが食べても困るので努めて冷静に、

「じゃあ、お腹がいっぱいで今食べたらもったいないし、やっぱりいただいて帰って後でゆっくりいただきますね。」

と答えると、嬉しそうにティッシュで包んだアリンコ最中を渡してくれました。
きっと自分が食べるのを楽しみにしていたのに、私に食べさせてやろうと思ってくれはったんや
などその顔を見た時に思いました。

お家を出た後、急いで最中を出すと、カバンの中からア리가わんさか出てきて泣きそうになりましたが、この方とは今も関係は良好です。

断固拒否の紅茶

逆に頑張っても関係作りが出来なかった経験もあります。

精神科訪問看護を始めて二年目の冬、大雪が降りました。
こわごわ車を運転し、雪が降りしきる中、初めてののお家に伺いました。

綺麗で立派なお家のインターホンを鳴らすと、利用者さんのおじいさんがニコニコして迎えてくれました。

あ、いい人そうでよかった。

家の中も綺麗に掃除されていて、受け入れも良さそう、これはアタリやな。

とテンションが上がりました。

勧められるまま席につくと、利用者さんのお姉さんと思わしき高齢女性が、無表情で広口のティーカップに入った紅茶を私の前に運んで来てくれました。

そして無言でティーカップを置くと、無表情のまま少し離れた距離からじっと私の方を見ています。

え？ちょっと待って？利用者さんておじいさんの方やんな？

あれ？どっち？

少々混乱しながら、でも寒かったので、

紅茶は嬉しいなー。

と思いながらひと口飲むと、

つべたっ！！

と思わず声が出そうになりました。

温かい紅茶だと思って飲んだのは歯が凍るほどキンキンに冷えたレモンティーだったのです。

しまった。

広口のカップにだまされたー。

少しも警戒しなかった自分を恨みながら「関係作り関係作り」と言い聞かせ、冷え冷えのアイスティーを飲み干しました。

あ～さぶいっ！

利用者さんとはにこやかに話ができていましたが、常にお姉さんの熱視線があり、会話を深めるのが難しく感じました。

それならばと、お姉さんに話を振っても、まるで聞こえてないように完全に無視されます。

行き詰まりを感じ始めた三回目の訪問の後、訪問看護お断りの連絡がありました。

理由は特に言われませんでしたがお姉さんとの関係作りに失敗したのだと思います。
関係作りは難しいと思った出来事です。

関係作りに秘訣なし

結局人間同士の相性もあるので、関係作りがどうやったら上手くいくかは今でもよくわかりません。

だから毎回体当たりです。

どんなお家かな？

どんな人かな？

どんなことが起こるかな？

緊張するけど、病院と違ってよそ行きではない利用者さんの顔が見られるのは、訪問看護ならではの楽しみでもあります。

私の『たいていの事に動じない心を手に入れるための修行』はまだしばらく続きそうです。